



水泳イベントに参加した子どもたちと田中さん(左端)と萩原さん(右端)
©WORLD SWIM AGAINST MALARIA

「ワールド・スイム・アゲinst・マラリア」

www.worldswimagainstmalaria.com/

「泳ぐことで救える命がある」—マラリアに苦しむ人々を救うことを目的とした、国際的チャリティー水泳イベント。日本では、**井本直歩子さん**、**岩崎恭子さん**、**柴田亜衣さん**、**田中雅美さん**、**中村真衣さん**、**萩原智子さん**、**源純夏さん**、**森隆弘さん**、**山本貴司さん**などの元五輪スイマーが中心となり、国内の水泳大会などで募金活動を行っている。集まった募金はすべて、マラリア予防のための蚊帳を購入する資金に充てられる。2010年6月25日には、世界中で一斉に「ワールド・スイム・アゲinst・マラリア2010」が開催される予定。



スタジアムでエチオピアコーヒーを販売するフー太郎の森基金のスタッフ
©フー太郎の森基金



「ベガルタ仙台のコーチをエチオピアに」

NPO法人フー太郎の森基金 × ベガルタ仙台

NPO法人フー太郎の森基金と今シーズンJリーグのJ1に復帰を果たした**ベガルタ仙台**の共同企画。サッカーを通じた国際貢献として、2011年1月にベガルタ仙台のコーチをエチオピアに派遣しサッカー教室を実施する。派遣費用はサポーターからの募金と、スタジアムで販売されるエチオピア産のコーヒーや雑貨の収益で賄われる。「サッカーをしたくてもできないエチオピアの子どもたちに接することで、指導する姿勢にも変化が起きてほしい」(ベガルタ仙台)。募金方法についての問い合わせは、フー太郎の森基金事務局(TEL:0244-38-7820)まで。

「スマイル アフリカ プロジェクト」

www.sotokoto.net/smileafrica/

月刊「ソトコト」と**高橋尚子さん**(シドニー五輪女子マラソン金メダリスト)が協働で行うプロジェクト。日本国内でサイズの合わなくなった運動靴を回収し、貧しくて靴が買えないケニアの子どもたちに贈っている。集まった運動靴は、JICAの青年海外協力隊などを通じて、現地の子どもたちに直接届けられている。また年1回、首都ナイロビで「ソトコト サファリマラソン」を開催。高橋さんも参加し、マラソンを通じて現地の人たちと交流している。「第2回ソトコト サファリマラソン」は2010年5月23日。運動靴の回収方法についてはHPを参照。

ケニアの子どもたちと交流する高橋さんとダグラス・ワキウリさん
©スマイル アフリカ プロジェクト / 鈴木勝



タンザニアの難民キャンプの子どもからタスクを受け取る瀬古さん ©EKIDEN for Peace 2010

「EKIDEN for Peace」

「難民に適したスポーツは何か」。この問い掛けに答えるべく、**瀬古利彦さん**(元五輪男子マラソン代表)が舵を取り、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)と国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)がタンザニアの難民キャンプで駅伝を企画。「タスク」をつなぎながら走ることで、スポーツの楽しさ、仲間とともに一つのことに取り組む意義などを体感してもらおうのが目的。また、日本国内でもチャリティーマラソンを開催し、アフリカと日本がつながっていくことの意義を若者たちに伝えている。今年2月にはブルンジ国境近くの難民キャンプで第2回目を開催。**有森裕子さん**も参加した。

アンコールワット国際ハーフマラソンで、車椅子の男性を励ましながら走る有森さん
©ハート・オブ・ゴールド



設立10周年記念誌「共に育つ—ハート・オブ・ゴールド10年の歩み—」を発行

「NPO法人ハート・オブ・ゴールド」

www.hofg.org/

有森裕子さん(バルセロナ五輪女子マラソン銀メダリスト、アトランタ五輪女子マラソン銅メダリスト)が代表を務める国際協力NGO。主にカンボジアを活動拠点とし、アンコールワット国際ハーフマラソンの運営協力をはじめ、カンボジア人の手によって国づくりができるよう、人材育成の分野に

力を注いでいる。また現在、JICA草の根技術協力事業(パートナー型)「小学校体育科教育振興プロジェクト」を通じて、カンボジアの小学校で体育科教育の本格的実施に向けて取り組む。日本にもカンボジア教育省の担当官を招致し、学校機関などで研修を実施している。

特集
スポーツの力
—人間力を育むもう一つの現場—

スポーツで国際協力してみよう!

スポーツと国際協力。

— 一見、かけ離れたものであるようだが、

実は世界の人を幸せにできる身近なアプローチの一つだ。

ここでは、スポーツに携わる人々が行う国際協力を紹介。

スポーツ好きなあなたも、自分なりの参加方法が見つかるかもしれない。

©KTP



JICAオフィシャルサポーターとして、世界各国を訪問している北澤さんと伊達さん

©JSM



「JICAオフィシャルサポーター」

JICAオフィシャルサポーターを務めるのは、サッカー解説者の**北澤豪さん**とプロテニスプレーヤーの**クルム伊達公子さん**。スポーツの最前線で活躍する二人だ。定期的に開発途上国を訪問してJICA事業の視察などを行い、日本国内で途上国の現状を伝えている。また訪問時、北澤さんはサッカーを、伊達さんはテニスを通じて、現地の子どもたちと交流を図っている。(裏表紙に関連記事)



プロスポーツチームもスポーツ用具を寄付

「JICA「世界の笑顔のために」プログラム」

JICAが年2回実施する物品寄付プログラム。途上国が必要とされている「モノ」を日本国内で募集し、JICAが派遣中のボランティアを通じて世界各地へ届ける。募集品目にはスポーツ用具も多く、これまでに**ガンバ大阪**、**柏レイソル**、**湘南ベルマーレ**、**大宮アルディージャ**、**日本プロバスケットボールリーグ**なども、シーズン中に使用したボールやユニホームなどを寄付。今年度の募集の詳細は29ページを参照。

「認定NPO法人柔道教育ソリダリティー」

www.npo-jks.jp/

「世界の子どもたちが皆、平等に柔道ができるように」と、リサイクル柔道着の寄贈、指導者の派遣、外国人選手や指導者の受け入れなどを行っているNGO。理事長は**山下泰裕さん**(ロサンゼルス五輪男子柔道無差別級金メダリスト、現東海大学教

授)。活動地は、中国、ロシア、イラン、ラオス、南アフリカ共和国など幅広い。今年3月には、山下さんが建設計画からかわった「日中友好南京武道館」が日本の無償資金協力により完成。開館記念として、山下さんが地元学生に柔道の稽古を行った。

海外の子どもたちに熱心に指導する山下さん。現役引退後は、海外でも柔道の普及に努めている ©柔道教育ソリダリティー

